

## 若柳 梅京

能楽堂を会場に数年前から白石市内の小学生数千人に日本の伝統文化を指導してきた若柳梅京さんは、日本舞踊である若柳流の直派若柳流師範名取。東京で生まれた梅京さんは2歳になる頃、仙台藩主伊達政宗公の懐刀であった白石城主片倉小十郎景綱公が眠る片倉家菩提寺「常英山 傑山寺」を継承することになった父親とともに、祖父が市長を務める白石の旧家へと戻ることになる。常に周囲から耳目を集める城下町の厳格な家で窮屈な思いを感じて毎日を通りながら、幼い頃から嗜んで来たピアノやクラシックギター、フルートなどの楽器演奏に傾倒し、音楽仲間達と組んだバンド活動では「ヤマハポピコン」東北大会の優秀賞に輝くような活発な女子へと成長を遂げて行く。また、高校2年の時には米国ミネソタ州への1年間の留学も経験。「生徒数2000人のマンモス校へ通ったのですが、周りの学生達は皆私に「アジアから来た黄色いおチビさん」という眼差しを向け、入学後暫らくは友達がひとりもできない状態でした。ところが文化祭の日に、私が日本から持参した着物で小学生の頃から教わった日本舞踊を皆の前で披露すると、翌日から周囲の態度が一変したのです。自国の文化を大切にしている日本人として学生達は尊敬の眼差しを私に向けるようになり、それこそ学内の全ての学生達と友達になることができました」。

留学前には作曲家を志し芸大への進学を考えていた梅京さんは帰国後、将来は日本と海外のかけ橋的な仕事に携わってみたいと思うようになり、国際関係学科がある東京の津田塾大学へと進学。卒業後はソニーやハナエモリ、インターナショナルなど国際企業のオフィスで語学力を活かして秘書や広報

の仕事を携わるが、90年、アトピーと喘息を患う息子の病氣療養の為軽井沢へと移り住むことに。そこで98年長野オリンピックと出会い、数少ない民間人として組織委員会に関わることになる。自分では「怖いもの知らずだった」と振り返るが、語学力を生かした交渉能力を評価され、開催前年にはスイスローザンヌにある国際オリンピック委員会(IOC)で日本との調整役としてサマランチ会長の下勤務、オリンピックの様々な難題を解決する原動力となる。

オリンピック終了後は東京で商社系IT企業のマネージャー職を務めるのだが、激務が原因で体調を崩し一時帰郷。「若い頃に名取をいたっていた日本舞踊に本格的に取組み始め、師範のお許しを頂戴した後は母からのアドバイスもあり、白石に拠点を定めてこれまでの自身の経験を地元の為に活かし、自分なりに郷里に恩返ししたいと思うようになりました」。4年前には大病を患うが、持ち前の明るさとプラス思考で気丈に病を封じ込めた。そして3・11の大震災時には発災直後から避難所で炊き出しを買って出、全国から自宅に届けられた支援物資の山をトラック積みして各避難所へリレー方式で配送する陣頭指揮を執りもした。「碧水園の能舞台に上がった小学生の皆さんには郷土に誇りを持ち、自信を持って日本文化を語るコミュニケーション能力が高い若者に育って貰いたいですね。また、今後は微力ながら民の立場で行政をサポートしながら、大好きな白石の街を元気にしていきたいと思っています」。和服姿で凛と佇む梅京さんの背景で、悲運の猛将真田幸村が愛娘阿梅を片倉鬼十郎に託した戦場のワンシーンが、フツと現れて消えた気がした。

わかやぎ ばいきょう

1960年、東京都生まれ。本名：麻生菜穂美(あそつ なほみ)。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業。ソニー、ハナエモリインターナショナルなどの国際企業を経た後、オリンピックに携わる。97年長野オリンピックの調整役としてスイスのIOC(国際オリンピック委員会)に出向。2000年より東京で米国に本社を置くIT企業のマネージャーを務め、現在もマーケティングコンサルタントとして活動中。直派若柳流理事。白石市文化協会副会長。白石市社会教育委員。

インタビュー／安達昌宏 撮影／大沼英樹

